けせん医報

目次

●巻頭言　「被災地支援に思う」
気仙医師会副会長・飯塚眼科医院院長　飯　塚　和　彦…2
●理事会報告……3
■第１回理事会報告……3
■第２回理事会報告……4
●随　想
「黒田官兵衛」うのうらクリニック　鵜　浦　哲　朗…7
「釣りの記憶」大船渡国民健康保険　吉浜診療所
中　舘　敏　博…8
●医院紹介……菊池医院　院長　菊　池　　洋…10
●県立病院各科紹介
岩手県立大船渡病院　副院長　小笠原　敏　浩…11
●平成26年度気仙医師会定時総会報告……12
●新入会員の紹介及び異動・退会のお知らせ……14
●事務局日記……15
●編集後記……16
●表紙のことば……16

KESEN ISI-KAI

第１３０号

2014. 7 . 25

気　仙　医　師　会

岩手県大船渡市盛町字内ノ目６－１
TEL：0192-27-7727　FAX：0192-26-2429
http://kesen-med.or.jp/

気仙医師会広報部　発行　平成26年７月25日　製作：村田プリントサービス

巻頭言

被災地支援に思う

気仙医師会　副会長
飯塚眼科医院　院長
飯　塚　和　彦

東日本大震災に見舞われてから3年余が経過した。被災地支援という言葉がしばしば話題にのぼる。数多くの被災地支援が企画され、その内の多くが実際に行われ、多くの被災者に恩恵をもたらしているのであろう。感謝すべきものと思われる。ここで、被災者の立場に立って、被災地支援を受け入れる際考慮すべき点について考えてみた。

まず、支援を申し出る者の支援に対する動機に留意すべきであろう。皆善意を謳い文句として、申し出るのであろう。その善意の多くにうそはなく、ありがたく迎え入れるべきなのだろう。その次に考えられるのは、何らかの利益を動機に支援を申し出る企業や団体であろう。その利益としては、イメージ戦略であったり、補助金等が考えられるが、合法的であれば、問題ない。例外的ではあろうが、私利私欲を求める者も隠れており、見極める必要がある。最たるものは、山田町のNPO法人による横領事件に見ることができる。

次に、どんな支援を企画しているのか、被災地でその支援と関わりのある人々が集まり、その支援の内容を吟味すべきであろう。どこで、どのような支援を、どんなスケジュールで行うか等々。例えば医療支援が企画されれば、一般の被災者には恩恵となろうが、被災者でもある医療関係者にとっては、自身の仕事を奪われることにもなりかねない。支援者と被災者と充分な議論が必要であろう。

最後に、その支援が終了した時点で、関係する被災者と支援者がともに、Win-Win の関係になることが、最も重要かもしれない。被災者が、支援から多くの恩恵を得て感謝する。純粋な善意からの支援者は、被災者の感謝の言葉に、満足感を得られる。このようなWin-Win の結果を得るには、関係する被災者と支援者の、事前の十分なコミュニケーションが不可欠と思われる。

随想

黒田官兵衛

うのうらクリニック
鵜浦哲朗

ＮＨＫ大河ドラマが面白い。夢中になるのは、小学生の時の石坂浩二主演の“天と地と”以来であるから、45年ぶりというところか。主演の岡田准一が決まっている。以前の主演作“ＳＰ警視庁警備部警護課第四係”でのアクションシーンは、切れ味鋭く印象に残っていたが、今回の官兵衛役では更に、共感を呼ぶ人間味あふれた演技である。歴女ならずとも好感が持てるだろう。

大河ドラマは、日本の国民的番組であり、その歴史は昭和38年からで今年は51年目になるらしい。テーマは、戦国時代の武将を扱ったものが多い。歴史ものを見る楽しみは、登場人物のいずれかに自分を重ね合わせて、自分ならその立場で何を考え、如何に振る舞ったかなどと考えを巡らす所にある。時代は違えども、事の大小は比較にもならないが、自分の日常に何かしらの示唆を与えてくれる気がする。これが長寿番組の人気の源なのであろうか。

さて、今回の“軍師黒田官兵衛”であるが、軍師というのがまた魅力的である。軍師は中国の兵法書に精通しており、考え方、生き様がまさにそのまま、今日の格言であり、生きる知恵なのである。官兵衛は、信長に遅れる事13年、播磨国姫路城主の嫡男として生まれ、22歳にして家督を継ぎ姫路城主になっている。信長は、26歳の時に桶狭間の戦いで今川義元を討ち、43歳の時に長篠の戦いで武田勝頼を破り、“天下不武”を掲げ天下統一にむけて破竹の勢いであった。官兵衛の仕える小寺家は播磨国の弱小大名であり、東からは織田信長、西からは毛利家の勢力争いに巻き込まれ、両者に挟まれて主戦場になっていた。

“国をおさむる者は義立てばすなわち王なり”国家を治める者は、正しい道理にのっとって国を治める事が出来れば王となる。小寺家の行く末を決める大評定で、毛利に傾いていた主君を織田に帰順させるために30歳の官兵衛が言った荀子の言葉の一節である。官兵衛の深い洞察力とこの説得により小寺家は救われたのである。しかし、猫の目のように形勢が入れ替わり、調略、裏切りが当たり前の戦国の世である。あろうことか毛利に寝返った主君に謀られ、官兵衛は敵に囚われ、１年もの間土牢に幽閉されることになる。父と慕った主君に裏切られ、謀反を疑った信長が嫡子を成敗したと聞かされ、光の無い土牢の中で絶望のどん底である。それでも、信義に厚い官兵衛は、家臣の救出を信じて生き抜くのであるが、はたして自分ならできるだろうか。無事救出され、家臣と抱き合うその姿は、涙なくしては見る事が出来ない感動ものである。

６月が終わり、これから後半に突入である。秀吉を支える官兵衛にとって、本能寺の変、山崎の戦いと次から次に見どころ満載である。たかが大河ドラマと侮っていたが、なかなか面白い。何より元気をもらえるのがありがたい。震災後３年間封印していたゴルフも始める気になった。ボヤっとしている暇はない。明日を信じて頑張ろう。

釣りの記憶

大船渡市国民健康保険　吉浜診療所
中　舘　敏　博

釣りを始めたのは小学のときだから、釣り歴だけは長くなっている。そのなかで今でも記憶にとどまっていることがある。

二十数年前の夏、竜飛の磯へクロダイ釣りに出かけた。かなりの体力を要する釣りであった。

籠を背負ってクーラーボックスを持ち、岬から海岸に下り、磯づたいに歩くこと数十分。ポイントはあらかじめ見当をつけていたが、天候が荒れそうだったので、あまり進まず、風裏の小さな入り江に決めた。

はじめのうちは潮の流れも緩やかで、えさ取りの小魚ばかりであった。時がたつにつれ、やはり、風邪が徐々に強まり、白波が目立ってきた。そして、うねりが押し寄せてくるようになった。いっこうに本命のあたりはなく、撒きえさも残り少なくなったころ、ふと気がつくと、先ほどまであれほど群れていた小魚が全くその姿を消していた。天気が荒れてきたせいだろうか、それとも……。そのとき突然、浮木が引き込まれ、キーン、キーンという糸鳴。強烈なひきであった。いままで経験したことのない強さ。全身がこわばるような感じで、鼓動が激しくなったことを今でもはっきりと記憶している。とにかく腕をいっぱいに伸ばして竿を立てたが、一気に走られ、そして左前方の岩棚の下に潜りこまれた。竿を右に寝かせてしのごうとしたが、あっという間のハリス切れ。しばし呆然 ——。

次の記憶もかなり前のことだ。

ふとしたことから、ある患者さんと釣りの話になった。八甲田山中の沼にイワナ釣りに行くという。人がほとんど立ち入らない、秘密にしている沼らしかった。その話を聞いているうちに、以前読んだ雑誌の記事を連想した。八甲田山中の、とある沼への釣行記であった。

以下のような内容と記憶している。

やっとたどりついたその沼は無人の気配であった。竿を出せる場所を探して沼の周囲をめぐっていたところ、繁みで何かの気配 —— 身が凍りつく思いであった。ところが、姿を現わしたのは人で、ひとことふたこと言葉を発し、そして忽然と繁みの中に姿を消した。沼は再びもとの静寂に……。

著者は「沼の怪人」と称していた。印象的な釣行記であった。

私はそのとき、目の前の患者さんは著者が沼で遭遇した人だ、と直感！

その沼に行ってみたいと思っているのだが、いまだに果たせていない。

医院紹介

菊池医院　院長
菊池　洋

昭和60年４月、縁あってタブロイド版「ケセンよみうり」紙にエッセイを頼まれた。数回ぐらいと思って引き受けたつもりだったが、気付いたら12年が過ぎていた。その最後の年、即ち平成９年８月に私は大船渡病院の近くに医院を建てた。49歳の遅い開業であった。その頃の事が「ケセンよみうり」に書き記してある。

『――― 開業して間もなく１ヶ月になるが、来る人の多くは「病院らしくないね」と言う。時代を経た古い梁などを用いて、昔の家屋風に作ったためであろうが、老人の多くがかつて暮らした住まいに近いものであれば、きっと心が和むだろうと思ってのこと。スタッフ共々大切にしているのは、患者さんとの心の触れ合いである。建物をきっかけとしてでも、お互いまず一歩近づくことができれば良いと考えている。

常々多くの人々に支えられて生きているわけだが、この医院ができたのも沢山の方々のお力添えがあったればこそ。感謝の気持ちを失うことなく、医療の場でもって恩を返すつもりでいる。取り分け、在宅医療では人生の終末期を共に歩み、病人としてではなく１人の人間として接することをモットーに、心豊かな病床生活を送れるようお手伝いをしたいと思っている。

昔の日本人がそうであったように、可能であれば医療の手から離れたところで、自然にすべてをゆだねた死を迎えさせてあげたい。少なくとも身体中に点滴の管なんかをつけずに（第149回）』

『――― 開業して２ヶ月になるが、在宅医療の要請がまだ３名しかない。あえて〝まだ〟と書いたのは、在宅医療をしたいがための開業だったからだ。このことを言うと、たいてい「寝たきりの患者は沢山いるし、皆医者の手を待っている」と返ってくる。ならば何故に依頼が来ないのだろうか。―――

最初の在宅医療の患者は91才の方で、２週間ほどのかかわりで死去されたが、その最後は心安らかな往生であったと思われる。水も殆ど口にせず眠っている毎日であったが、亡くなる前日、家族に「自分の余命も２日であろう」と話されたとか。私と前後し、看護婦も連日訪問したが苦しむ姿を見ることもなかった。静かな終焉、病死とはいえ穏やかな死に顔であった。在宅医療の根幹は故意に生きながらえさせることではない。許される時の中で望む生き方を支え、尊厳ある最期を迎えさせることにある。その意味において、この方へのかかわりは納得のいくものであったと自負している。開業して直ぐ死亡診断書を書くことになったが、そのような機会を与えられたことに喜びを感じている。―――　（第150回）』

『――― 今年、開業と同時に医院の周りにたくさんの樹木の苗を植えた。ナラやヤマザクラ、我家の庭に芽を出したケヤキなどの広葉樹が多い。捨てられてあった切り株も３本植えた。ひこばえが出ていたからだ。10年もすれば、きっと雑木林ができよう。そこにはホスピスがある。木もれ日の中で安らかに最期の時を待つ、ゆったりとした桃源の世界。そんな思いを胸に植えた樹々を眺めている。（第151回）』

あれから18年、多くの家庭を訪問し、そして最期を看取ってきた。だが、在宅医療が広がりをみせ、需要も増えるにつれ何か満たされない想いと共に気持ちが萎えていった。その原因は心の介在しない、医療ビジネスと化した在宅医療、即ち在宅医療のコンビニ化にあろうか。

エッセイを読み返してみて、あの頃の終末医療にかけた熱い想いが懐かしい。夢敗れ雑木林だけが残った。

県立病院各科紹介

県立大船渡病院　副院長
小笠原　敏　浩

県立大船渡病院産婦人科は医師５人で周産期医療・婦人科診療・婦人科治療・手術を中心に診療を行っています。医師は岩手医科大学産婦人科から派遣されており、明るく元気な男性医師４人・女性医師１人で診療をおこなっています。

気仙地域に出産施設・産科施設がないため唯一の出産施設・産婦人科医療施設として機能しなければなりません。私たちの大先輩の飯田民次先生が震災後の諸事情により産婦人科クリニックを閉院されたため、気仙地域に連携施設がなくなりとても苦労しています。飯田先生が当地域でご苦労され大きな役割を果たされていたことを改めて実感している毎日です。

また、釜石保健医療圏の唯一の出産施設である県立釜石病院へ医師を派遣し釜石地域の出産も維持しています。同じく出産施設のない遠野市とは遠隔妊婦健診などの連携をしています。

当院は地域周産期母子医療センターとして、ハイリスク分娩・ローリスク分娩に対応しており、周辺地域（釜石市・遠野市など）からの救急搬送や紹介を受け入れています。また、日本周産期・新生児医学会の修練施設、日本婦人科学会専門医を育成する修練施設として学会より認定を受けています。また、岩手県で唯一の産婦人科内視鏡手術技術認定医のいる施設として、腹腔鏡手術の研修施設として腹腔鏡手術に積極的に取り組んでいます。

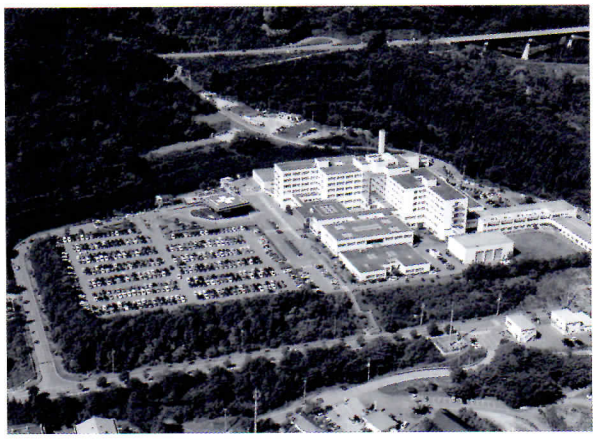
午後外来では、助産師による助産外来を開設しています。助産外来には、ローリスク助産外来・医師と協働のハイリスク助産外来・産後２週間健診を助産師主体でおこなっています。

その他、産婦人科医師不足により、当地域も含め沿岸地域では産婦人科医療機関が減少しており、その解消策としての連携型電子カルテで周産期情報連携や市町村を含めた周産期医療連携のモデル地区として県の事業にも積極的に協力しています。

今後も気仙地域の唯一の産婦人科施設として日々努力してまいりますので、今後も、医師会の先生方のご指導をよろしくお願いします。

病院の詳細は大船渡病院ホームページ

http://oofunato-hp.com/に是非アクセスしてください。



平成26年度　気仙医師会定時総会報告

○総会の種類：一般社団法人
気仙医師会定時総会
○開催年月日：平成26年5月21日（水）
午後6時30分
○開催場所：大船渡プラザホテル
○会員総数：63名（A会員21名・B会員42名）
○資格審査報告：本人出席15名・委任状18名
計33（最終確認・本人出席30名）

議長より、資格審査確認の報告求められ、遠藤総務理事より「資格審査報告」

会員数63名中、本人出席15名・委任状18名、計33名で定款28条の定めにより、本総会が成立したことが報告され、了承された。

1、開　　会

菊池議長より、定刻になったので平成26年度気仙医師会定時総会の開会を通告。

2、会長挨拶

社団法人から一般法人へ移行し、1年が経過した。我々、現役員は今年度も役員の改選があり今後は定めにより、2年間の任期で其の任に当たることになります。

気仙医療圏のような過疎地にあって、小児救急、在宅医療等を柱とする地域医療連携システムの構築を進めていく必要がある。それぞれの会員もとより、特に理事等各位におかれましては公の役割へのご理解とご協力をお願いしたい等々の挨拶、そして今日は、及川登先生、佐々木謙亮先生御両人の長年にわたる、地域医療への御貢献に対しましてのご尉労の会と、新入会員の歓迎会を併せて開催致しますので宜しくご懇談をいただきますようお願いし挨拶を締め括った。

3、署名委員指名

遠藤総務理事より、署名委員に飯田民次、山浦玄悟の両先生を指名し、議場の承認を受けた。

4、報　　告

昨年、社団法人から一般社団法人に名称変更になり1年経過した。

現役員は、定めにより1年の任期で、総会終結までということで本日の総会を迎えたところです。本日、総会で新たな体制が整えますと、今後任期2年間となり、県医師会、日本医師会と同じ任期で改選が進むことになります。

本日の議事進行等につきまして特段のご理解・協力をお願い致しまして報告とします。

5、議　　事

議案第1号　気仙医師会役員の承認を求める件について

議長は、理事等候補者推薦委員会（事務局）の説明を求める。

推薦委員長から（遠藤総務部長より）提案説明

去る、3月12日（水）気仙医師会理事等推薦委員会で、次の方々の推薦を決めたので本総会での議決をお願いする。

理事候補者には、滝田有、鵜浦章、飯塚和彦、伊藤達朗、岩渕正之、伊藤俊也、遠藤稔弥、盛直久、鳥羽有、渕向透、星篤樹、田畑潔、山浦玄悟、監事候補者には、佐々木道夫、及川東士を、また、医師会の議長団としては、議長に菊池洋、副議長に菊田裕を選出することが提案された。

議長は、本案について承認を求めたところ各候補者とも全会一致で承認・議決された。

此の後、暫時の間、臨時の理事会を開催するため休憩

理事会での協議結果、気仙医師会役員体制、気仙医師会選出・推薦による役員に以下の方々が選出され承認が求められた。

気仙医師会役員体制、会長滝田有、副会長には鵜浦章、飯塚和彦、伊藤達朗の3名、総務理事岩渕正之、又、医師団議長には、菊池洋、副議長に菊田裕を、外部から監査役として、上野直和氏を選任した。岩手県医師会代議員には、飯塚和彦、伊藤俊也、予備代議員に、遠藤稔弥、山浦玄悟、県医師会裁定委員に、櫻井末男、県医師会理事には滝田有を選出し、本会での承認を求めた。

議長は、議場に本案について承認を求めたところ全会一致で議決された。

議案第2号　平成25年度事業報告書の認定について

議長は、事務局に説明を求めた。

遠藤総務理事から、資料に基づき科目ごとに事業の経過について報告。

議長は、議場に本案について認定することを求めたところ全会一致で議決された。

議案第3号　平成25年度（社）気仙医師会収支決算書の認定について

議長は、事務局に説明を求めた。

遠藤総務理事から、収支についての財産目録、貸借対照表、正味財産増減計算書等により、科目毎に詳しい説明と、公益目的支出計画実施報告についての説明のあと、引続き監事からこれら一般会計並びに公益目的支出計画の特別会計

についての監査報告を受け、議場に諮られた。
議長は、議場に本案について認定を求めたところ全会一致で議決された。

議案第４号　平成26年度（一社）気仙医師会事業計画（案）の認定について

議長は、事務局に説明を求めた。
遠藤総務理事から事業計画書に基づき説明、議長は、議場に本案の認定を求めたところ、原案通り、全会一致で議決された。

議案第５号　平成26年度（一社）気仙医師会収支予算（案）の認定について

議長は、事務局に説明を求めた。
遠藤総務理事から、予算書（案）に基づき、収入・支出の各科目の款、項により説明、議長は、議場に本案の認定を求めたところ、原案通り、全会一致で議決された。

６、そ の 他

特になし。

７、閉　　会

議長より、　議場に閉会を通告し、終了した。
※此の後、会場を移動し、及川登先生、佐々木謙亮先生の長年の地域医療へのご貢献を感謝しての慰労会と、本年度の新入会員歓迎会、も併せて開催され　和気あいあいの懇談が続き余韻が残るなかお開きを迎えた。

新入会員の紹介

大竹伸平先生

入会日　平成26年4月1日
生年月日　昭和53年7月6日
出身校　岩手医科大学医学部
勤務先　県立大船渡病院

宮口　潤先生（研修医）

入会日　平成26年4月1日
生年月日　昭和62年10月29日
出身校　岩手医科大学医学部
勤務先　県立大船渡病院

内村洋平先生（研修医）

入会日　平成26年4月1日
生年月日　昭和58年6月17日
出身校　岩手医科大学医学部
勤務先　県立大船渡病院

及川諒介先生（研修医）

入会日　平成26年4月1日
生年月日　昭和63年5月10日
出身校　岩手医科大学医学部
勤務先　県立大船渡病院

佐々　航先生（研修医）

入会日　平成26年4月1日
生年月日　平成1年12月31日
出身校　岩手医科大学医学部
勤務先　県立大船渡病院

阿部正和先生（研修医）

入会日　平成26年4月1日
生年月日　平成1年6月28日
出身校　岩手医科大学医学部
勤務先　県立大船渡病院

会員の異動

平成26年4月1日

及川　登先生（及川外科医院）
A会員からB会員へ

会員の退会

平成25年12月31日

佐々木謙亮先生　（廃業）

平成26年3月31日

千田光平先生　花巻医師会へ

平成26年4月1日

鵜浦喜八先生　（退職）

事務局日記

（4月～6月）

4月9日　第1回総務部会（気仙医師会館）

4月10日　長谷川会計事務所来館（気仙医師会館）

4月11日　県医師国保組合事務研修会（県医師会館）

4月14日　風しん抗体検査の受入調査（A会員のみ）

4月16日　長谷川会計事務所来館（気仙医師会館）

4月23日　学術講演会（大船渡プラザホテル）

4月24日　平成26年度第1回理事会（気仙医師会館）

4月25日　「けせん医報」第129号発刊

5月7日　平成26年度定時総会通知

5月12日　岩手県予防医学協会、米沢企画管理部長来館

5月15日　気仙医師会定時監査（気仙医師会館）

5月19日　産業保健センター健康相談日（鵜浦医院）

5月21日　平成26年度定時総会（大船渡プラザホテル）

5月22日　医師会会館清掃（リンピア）

5月24日　第8回県医師会理事会及び郡市医師会長協議会（県医師会館）

5月27日　産業保健センター健康相談日（菊田外科医院）

5月27日　学術講演会（大船渡プラザホテル）

5月28日　一般社団法人気仙医師会役員等登記手続き（畠山司法書士事務所）

6月4日　第1回広報部会（気仙医師会館）

6月9日　産業保健センターコーディネーター会議（仙台市）

6月17日　産業保健センター健康相談日（岩渕内科医院）

6月18日　医療法人済生会伊東理事等と滝田会長面談（気仙医師会館）

第2回理事会（気仙医師会館）

6月25日　ホームページについてシステムヘースと打合せ（気仙医師会館）

6月26日　いわて国体実行委員会設立総会（シーパル）伊藤事務長代理出席

県産業保健総合支援センター斎藤専門職来館（気仙医師会館）

6月30日　ロタウイルス実施報告書を配布（理事、監事及びA会員へ）

編集後記

お忙しいところ急ぎ短期間で御執筆いただいた先生方に大変感謝申し上げます。
お陰さまで第130号の発刊に漕ぎ着けました。
気仙医師会は一般社団法人に移行して1年が経過し、5月の総会で新体制となりました。
開業医が減少し負担が増す一方で様々な課題が山積しており、前途洋洋とはいえませんが皆様にはさらなるご協力をお願いいたします。
今回、鵜浦哲朗先生にはNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」を語っていただきました。なによりも先生がドラマをきっかけに元気になりゴルフを始められたことを嬉しく思います。
病院紹介として県立大船渡病院の小笠原先生には「産婦人科」の当地域における厳しい現状を、開業医の菊池先生には開業当初の在宅医療にかける熱い思いを披瀝していただきました。国が進める地域包括ケアの流れで、今後ますます在宅医療のニーズが高まると思われます。所期の目的を忘れず一層の奮起をお願いする次第です。　　（編集担当　S.I.）

表紙のことば

陸前高田市気仙川河口に架かる「希望のかけ橋」

川をまたいで気仙町と旧市街地を結ぶ総延長3kmに及ぶ土砂運搬用のベルトコンベアーの吊り橋。気仙町西側の山を切り崩して高台移転地域を造成し、出てきた土砂を盛り土用に運搬している。
白砂青松が美しかったあの高田松原が、今は林立する鉄塔とむき出しの赤土に覆われ目に痛々しい。やがてこの一帯は復興祈念公園として整備される見通しだが、美しい高田松原が戻ってくるのは一体いつの日になるだろうか。

（航空写真：村田プリントサービス提供）